

令和4年度  
劇場・音楽堂等機能強化推進事業  
(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)  
成果報告書

団 体 名	公益財団法人ニッセイ文化振興財団	
施 設 名	日生劇場	
助 成 対 象 活 動 名	公演事業・普及啓発事業	
内 定 額 ( 総 額 )	34,782	(千円)
	公 演 事 業	33,918 (千円)
	人 材 養 成 事 業	0 (千円)
	普 及 啓 発 事 業	864 (千円)

(1) 令和4年度実施事業一覧【公演事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	ニッセイ名作シリーズ 2022/日生劇場ファミリーフェスティバル2022 バレエ「真夏の夜の夢」	2022年7月11日 (月)～18日(月)	【出演】東京シティ・バレエ団 【指揮】井田勝大 【演奏】東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団	目標値	11,615
		日生劇場		実績値	9,462※
2	日生劇場ファミリーフェスティバル2022 物語 付きクラシックコンサート「アラジンと魔法の音楽会」	2022年7月30日 (土)、31日(日)	【出演】加未徹、与那城敬 他 【指揮】大井剛史 【演奏】ニッセイシアターオーケストラ 他	目標値	4,280
		日生劇場		実績値	3,946
3	日生劇場ファミリーフェスティバル2022 ダンス×人形劇「エリサと白鳥の王子たち」	2022年8月6日 (土)、7日(日)	【出演】辻田暁、鈴木ほのか、人形劇団ひとみ座 他 【脚本】長田育恵 【演出】扇田拓也	目標値	3,518
		日生劇場		実績値	3,073
4	日生劇場ファミリーフェスティバル2022 NHK みんなのうたミュージカル「リトル・ゾンビガール」	2022年8月20日 (土)※	【出演】高橋ひかる、熊谷彩春、石井杏奈、伊藤理々杏 他 【脚本】徳野有美 【演出】鈴木ひがし	目標値	10,338
		日生劇場		実績値	1,216※

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

### (3) 令和4年度実施事業一覧【普及啓発事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	日生劇場〈オペラを知る〉シリーズ 2022	2022年4月3日 (日)、17日(日)、9 月3日(土)他	登壇・出演：河原忠之、高橋絵理、 石田滉、山本康寛、黒田祐貴、岩田 達宗、栗國淳、田尾下哲 他	目標値	480名 (80名 ×6回)
		日本生命日比谷ビル 7階大会議室 ほか		実績値	302名※
2	第29回 日生劇場舞台フ ォーラム 2022	2022年11月10日 (木)	登壇：田尾下哲、松生紘子、稲葉直 人、萩野緑	目標値	350名
		日生劇場		実績値	234名

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

## 2. 自己評価

### (1) 妥当性

自己評価
<p>社会的役割等（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。</p>
<p><b>【社会的役割・地域特性】</b> 日生劇場は設置者の日本生命保険相互会社が社会貢献活動において目指す「児童・青少年の健全育成」「豊かな文化の発展」を、舞台芸術の振興と普及をつうじて実現するため、「届ける」「育む」「支える」をミッションに事業を実施している。所在する日比谷は劇場集積エリアであると同時に、港区や中央区など子育て世代の人口増加が顕著な地域にあることから、本事業においても舞台芸術の創造・発信と鑑賞機会提供を通じ、豊かな社会の礎となる子どもたちの情操涵養に努めるとともに、文化環境の向上を目指した。</p> <p><b>【令和4年度事業】</b> 引き続き新型コロナ禍という、制作の現場でもお客様を迎える劇場としても難しい環境下ではあったが、中学・高校生を対象にした鑑賞教室公演・ニッセイ名作シリーズ2022 バレエ「真夏の夜の夢」では、3,856名の生徒がオーケストラの生演奏による本格的バレエ公演を鑑賞した。夏休みに実施した家族向け公演・日生劇場ファミリーフェスティバル公演では、新型コロナの影響で25公演中9公演を中止したことで目標を下回る結果になったものの、4演目16公演に13,841名の入場者を迎えることが出来た。また公演事業の5演目中、3演目が自主制作、うち2演目は新制作であり、劇場独自の舞台芸術作品を創作・発信する取り組みを通じて、文化環境の向上に寄与することも出来た。</p> <p>普及啓発事業では、予定通り「&lt;オペラを知る&gt;シリーズ」と「日生劇場舞台フォーラム」を実施した。前者は新型コロナの影響で定員を制限、後者はコロナ禍以降の取組として収録・配信を並行実施したため、いずれも来場者数では目標を下回ったものの、ポストコロナに向けた過渡的な状況であると考えている。</p> <p>以上、令和4年度は公演の中止も含め引き続き新型コロナの影響を受けたが、当劇場の社会的役割や地域の特性等に基づいた事業を実施出来たと判断している。</p>
<p>助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。</p>
<p><b>【文化的意義】</b> 前述のとおり、令和4年度は2演目の新制作を含む3演目を自主制作公演として上演した。当劇場のサイズで大人向けの一般公演に遜色ない規模感のファミリー向け舞台作品を制作する団体は全国的にも数が少なく、前述のとおり子どもたちに質の高い舞台作品の鑑賞機会を提供したことに加え、プランナーや公演関係者にとっても貴重な創作の場となり、当劇場もオリジナル作品を創造・発信することが出来た。これらは直接的には来場者の文化的ニーズに応えるとともに、自主制作作品等の創作プロセスをつうじて舞台芸術の振興に寄与するなどの文化的意義があると考えている。</p> <p><b>【社会的意義】</b> 本事業は、多くの子ども（保護者）に、劇場に足を運び、舞台芸術を生で体験してもらうことを重視しており、そのために多様なチャンネルでの周知や来場しやすい低廉なチケット価格設定など、様々な取り組みを行っている。中でも一都三県の自治体、教育委員会をはじめ各地の教育関係団体に協力・後援頂いての広報展開（※（2）有効性で詳述）は、事業の社会的意義を広く認めて頂いていることの証左と考えており、またこれら機関・団体の協力があつてこそ、来場者の過半を占める児童・生徒への鑑賞機会の提供が実現している。</p> <p><b>【経済的意義】</b> 経済波及効果について具体的な調査は行っていないものの、事業実施における各種制作費や出演料、人件費等の支払いといった直接的効果に加え、1都3県を中心に広範から来場する方々の当日の消費活動なども、事業実施に伴う経済的意義と言えるのではないかと考えている。</p> <p>舞台芸術をつうじて社会をより豊かなものにしていくため、引き続き各所からの支援を頂きつつ、当劇場の事業をより発展させていきたいと考えている。</p>

## (2) 有効性

### 自己評価

目標を達成したか。

(文中、【】内の数字は指標に対する達成度合い)

公演事業では、幼児・児童（及びその家族等）や中高生を対象にした質の高い舞台芸術を制作、鑑賞機会を提供することで、文化芸術の振興とともに、次代を担う子供たちの豊かな情操涵養に努めることを目標に、幅広い年齢層をカバーするジャンルの公演事業を実施し、一部、達成度が指標を下回ったものの、概ね目標を達成した。

#### 【1. ニッセイ名作シリーズ バレエ「真夏の夜の夢」(中学・高校生向無料鑑賞教室事業)】

日生劇場から半径 50km 圏内の中学・高校の 75.8%／2,159 校【-1.2%／-40 校】に対し案内状を送付し、32 校【+8 校】から応募を得た。調整の結果 28 校から合計 5,167 名【-78 名】が鑑賞予定であったが、新型コロナの影響で 3 校の 1,311 名が辞退、直前のことで代替校を調整できず、最終的に 3,856 名【-1,389 名】と、目標を下回る結果となった。約 7 割の生徒が本事業で初めてバレエを鑑賞する(回収率 62.9%の鑑賞後アンケートでは 69.2%が、バレエ鑑賞が初めてと回答)ため、バレエの約束事や作品内容をまとめたオリジナル DVD 教材を無料配布(同じくアンケートでは、DVD 鑑賞生徒のうち 83.1%が鑑賞により作品理解が深まったと回答)したほか、上演時には場面解説の字幕も設置した。同じくアンケートによる作品満足度は 93.9%【+1.9%】と高く、本事業の取組に一定の評価・効果が得られているものと考えられる。

#### 【2. 日生劇場ファミリーフェスティバル(幼児・児童とその家族向けの夏期有料公演事業)】

例年通り 1 都 3 県の自治体・教育委員会等からの後援を頂き、日生劇場から半径 50km 圏内の幼稚園・小学校の 84.5%／5,070 校【+5.5%／+328 校】で、園児や児童の家庭に公演情報を周知した。今年度は全体の公演数が例年に比べて多い中で、コロナ禍の影響もあって、チケット販売は全体的に低調で、販売率は 64.4%【-17.6%】と目標を下回った。他方で観客アンケートにおける公演満足度は 92.8%【+0.8%】と引き続き高水準であったことから、新型コロナの影響で外部媒体への露出など券売状況に応じた機動的な公宣活動が難しく、オリジナル作品の魅力十分に周知出来なかったことに加え、感染の急拡大時期と販促時期が重なったことが要因として考えられる。また、公演関係者複数名の体調不良により、25 公演中 9 公演が中止となるなど、新型コロナの影響で、全体の 1/4 強のチケットを払い戻した。

当劇場では、全ての活動において普及啓発の観点を取り入れ、作品制作やチケット価格設定、公演情報周知に取り組んでいるが、今回、助成対象として特に「普及啓発事業」として実施した 2 事業は、主催オペラ公演の鑑賞機運を高めることを目標に実施した。新型コロナの影響を主因に、人数に関して達成度が指標を下回った。

#### 【1. 日生劇場〈オペラを知る〉シリーズ 2022】

毎年 6 月と 11 月に実施している主催オペラ公演の作品を音楽面、演出面で掘り下げる講座やミニコンサートを、作品の出演歌手や演出家をゲストに迎え、5 回実施した。例年 120 名を定員に申込制で実施しているが、新型コロナの影響で 80 名に制限したことで、1 回あたりの申込者数は 79.2 名【-53.8 名】と目標を下回ったものの、来場者アンケートによる満足度は 89.5%【+3.5%】と目標を上回った。

#### 【2. 第 29 回 日生劇場舞台フォーラム 2022】

11 月に上演したオペラ「ランメルモールのルチア」を題材に、作品プランナーが登壇、実際のセットや衣裳などを舞台上で展示・操作しながら、制作プロセスを紹介した。3 年振りの有観客実施となったが、来場者は 234 名【-116 名】と目標の 2/3 に留まった。コロナ禍において好評だった収録配信を並行実施したことが、来場者目標未達の主因と考えられるが、収録配信では会場に比べ詳細な内容を紹介出来る側面もあり、ポストコロナにおける企画の在り方として次年度も収録配信を並行する予定である。来場者数への影響を引き続き注視したい。

### (3) 効率性

#### 自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。

中高生向けの無料鑑賞教室公演である「ニッセイ名作シリーズ バレエ『真夏の夜の夢』」は、例年通り学校側が各種行事との調整が行いやすい7月上旬に設定、調整の結果、鑑賞予定者数は（コロナの影響による直前キャンセル分を加えれば）目標の98.5%となった。

「日生劇場ファミリーフェスティバル」も、幼稚園児や小学生の初めての舞台鑑賞機会として、保護者と一緒に来場出来るよう、例年通り夏休み期間中に実施した。チケット販売率は目標を下回ったが、これは(2)有効性に記述した理由によるものと考えられることから、貸劇場との兼ね合いで主催事業時期を分散できないという制約がある中で、時期設定は適切であったと考えている。

普及啓発事業としては主催オペラ公演を題材に行う「日生劇場＜オペラ＞を知るシリーズ」で、当該オペラの本公演告知にあわせて広報や事業を行った。オペラ鑑賞にハードルの高さを感じる方にとっては、鑑賞までに段階を経て理解を深める機会があることが分かることで、公演に来場する判断の一助となるタイミングと考えている。また、「日生劇場舞台フォーラム」は企画の特性上、実際に題材となるオペラが上演中の劇場で行うため、今回は11月公演の作品にあわせての実施とした。

公演事業、普及啓発事業とも時期の設定に関しては特段の課題はなく、事業期間は適切であったと考えている。

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

令和3年秋の要望書作成の時点では、令和4年度もそれまでと同様の感染予防対策が必要になると見込まれていたことから、公演事業においては例年の予算規模の中に対策費を含めたため、作品本体の制作費は若干抑制しての予算編成となった。支出面では、制作過程において大道具など舞台費の一部で予算を超過する演目があったが、新型コロナの想定を超えた感染拡大による対策費追加や公演中止リスクなども鑑みて支出をコントロールしたこともあり、助成対象経費支出は申請書提出時から約7.5%下回っての決算となった。

一方で収入面では先述のとおり「日生劇場ファミリーフェスティバル」事業のチケット販売率が目標を下回ったことに加え、結果として新型コロナの影響で中止になった公演を中心に全体の25%強のチケットを払い戻したことで、申請書提出時から約28%減少した。これは上述の支出面での削減分を上回る収入減となり、自己負担額が増加することになった。新型コロナによる公演中止は、感染予防対策を講じたとしても予見の難しい不可抗力によるものではあるが、事業予算に与えるインパクトが大きく、劇場事業全体の継続性にも関わるため、5類感染症へ移行したとはいえ、当面のあいだは支出面で保守的な予算執行が求められるものと思われる。

普及啓発事業においては、2回予定していた有料のロビーコンサートのうち1公演が、出演者や会場の都合で翌年度に変更となったことで、収入が予定の約半分となったが、ワンコインコンサートということもあり予算に占める入場料収入の割合が低く、事業への影響はなかった。対して助成対象経費支出は申請書提出時から1.8%減であった。

以上、特に公演事業においては計画から大きな差異が生じたが、主たる要因が新型コロナの影響によるものであることを鑑みると、事業費の設定は概ね適切であったものと判断している。

## (4) 創造性

### 自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

日生劇場は、劇場や商業施設が集積し、舞台芸術やエンターテインメントを目的とした来街者の多い日比谷において、1963年の開場から一貫して、舞台芸術の制作・上演をとおして次代を担う子どもたちの情操涵養に資する事業を継続してきた。特に開場翌年の1964年に開始した児童・生徒を対象とした無料鑑賞教室事業（ニッセイ名作シリーズ事業）では、2022年11月に累計招待者数が800万名を突破するなど、多くの子どもたちに、生の舞台芸術に触れ、体験する機会を届けてきた。また、港区や中央区など、近年特に子育て世代の人口流入が続く地域に所在する劇場として、家族そろって（大人も）楽しめる作品で毎年2万名前後の来場者を迎える日生劇場ファミリーフェスティバル事業も、1993年の事業開始から30年の節目を迎えた。

長年、従来の子ども向け舞台作品とは一線を画し、大人向け作品の制作と遜色ない規模・体制で作品制作にあたってきたことで得たノウハウや、舞台関係者とのコネクションをもって活動を継続することで、当劇場事業をCSR活動として重視する日本生命相互保険会社や、当劇場が制作する舞台作品の価値を信頼し、広報への協力や鑑賞教室事業に参加される学校や自治体、教育団体からの負託に応え、公演に来場いただく児童・生徒や保護者に満足いただく作品を提供することが、当劇場に求められる文化拠点としての機能であると認識している。そのため、当劇場は主催事業において作品の質を向上するべく、芸術参与（2018年からはオペラ演出家の栗國淳）や

(5) 持続性にて詳述する各部署に専門人材を配置している。

令和4年度に助成対象となった公演事業では、4演目中3演目が自主制作作品で、うち2演目が創作初演となった。そのうち2演目の自主制作作品は、当劇場での上演後に、全国公演として巡回した（但し、新型コロナ及び台風の影響で1演目4公演を中止）。

創作初演の一つ目は、演劇とコンサートを融合させた日生劇場独自の形態である「物語付きクラシックコンサート」の新作「アラジンと魔法の音楽会」。「世界の音楽」をテーマに、ソリストやプロオケの首席奏者らによるフル編成の特設オーケストラの演奏、大井剛史の指揮で、オペラ歌手の加来徹、与那城敬と舞台俳優の小関明久、万里紗、カンタオールの石塚隆充などの演唱による本格的な音楽を、お芝居の進行に合わせて分かりやすく紹介していく構成とした。演出は我が国のオペラ界を牽引する演出家の栗國淳（日生劇場芸術参与）、作編曲は大人から子どもまで、幅広い世代が楽しめるコンサートが人気の加藤昌則が手がけ、コンサート（演奏・歌唱）とお芝居（演劇）の、高いクオリティでの融合を実現した。

創作初演のもう一つは、「NHK みんなのうた」の楽曲で構成されたオリジナル・ミュージカル「リトル・ゾンビガール」。貸劇場公演で大型ミュージカルが多く上演される当劇場は、一般の演劇ファンにミュージカル劇場として認知されていることから、家族連れで安心して楽しめるファミリーミュージカルを目指した。東宝などの大型ミュージカルで活躍する鈴木ひがしを演出に、八幡茂を作曲・音楽監督に迎えた本作は、共生社会をテーマに、人間とゾンビという異種族の子どもたちが、対話を通じて戦争を回避し、相互理解を深めていくという極めて今日的な内容で、子どものみならず親、祖父母の世代にも耳馴染みのある「みんなのうた」の楽曲を生演奏で届ける、エンターテインメント性とメッセージ性を兼ね備えた内容となった。

普及啓発事業においても、主催オペラ公演の指揮者や演出家、プランナーが自身の口で作品について語り、実際の出演者やカバーキャストが当該作品の楽曲をミニコンサートで紹介、そのプログラム単独でも十分に満足いただける内容で、オペラを楽しむための多角的な視座を提供した。

以上のことから、令和4年度においても、当劇場の長年の取組のうえに地域特性を加味した主催事業を実施することで、当劇場に期待される役割を果たすことが出来たと考えており、今後も来場者をはじめ、多様なステークホルダーの方々の負託に応える事業を実施していく所存である。

## 自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながった（と認められる）か。

日生劇場の所在する日比谷には、周辺に多数の劇場があり、歌舞伎などの伝統芸能から大型ミュージカルまで、多様な舞台芸術、エンターテインメントが提供されており、当劇場も年間8ヶ月の貸劇場期間においてはミュージカルや演劇のロングラン公演が行われている。一方でこの地域において子ども向けの（大型）作品が十分提供されているとは言い難く、当劇場のファミリーフェスティバル事業は、地域にお住まいの方々を含めたファミリー向け公演のニーズに応えてきた。

令和4年度の公演事業においては、前述のとおり日生劇場ファミリーフェスティバル事業でチケット販売率が指標を下回ったものの、来場者アンケートで捕捉している公演満足度においては、ニッセイ名作シリーズ公演が93.9%、ファミリーフェスティバル公演が92.8%といずれも高く、自由記述でも、例えば「リトル・ゾンビガール」を鑑賞した小学生から、「『勇気を出して一歩踏み出すこと』の大切さがわかった。」「『ゾンビのものでも、人間のものでもない、みんなの森』という言葉にその通りだと思った」など、作品のテーマやそれを包括するセリフに対する共感のコメントがあるなど、子どもたちに作品に込めたメッセージが伝わり、そのクオリティが評価されたものと考えている。

また、東京ミッドタウン日比谷において周辺の劇場・芸術団体が集まり、観劇への機運醸成のために実施している「日比谷フェスティバル」に参加し、創作初演の2演目でミニステージを上演・配信することで、地域の文化的価値向上に寄与したほか、当劇場が単独ではリーチできない来場者へ訴求することが出来た。

なお、本助成を得て制作したNHK みんなのうたミュージカル「リトル・ゾンビガール」とダンス×人形劇「エリサと白鳥の王子たち」は、その後、各地の小学生を対象とした芸術鑑賞教室事業や一般有料公演（いずれも助成対象外事業）として、全国16都市で合計26公演の巡回公演を実施した。特に地方都市の公共ホールでは、子ども向け舞台芸術に対して地域住民からの高いニーズや施設を所管する自治体からの実施要求がある一方で、財源や制作面でのハードルが高く、日生劇場の自主制作作品の巡演は、当劇場の「届ける」というミッションにも適った上で、各地の文化芸術の振興に寄与するものとして、今後も様々な地域の劇場と連携のうえ、継続していくものである。

普及啓発事業においては、当劇場で主催するオペラ公演を題材にした2事業を実施した。総合芸術と言われるオペラだが、鑑賞経験が少ない方には、特別な知識がないとわからないのでは、とハードルの高さを感じる声があることも事実で、事前に作品について知ることによって鑑賞のための視座を提供するとともに、そのハードルを下げ、新しい観客を育てることを目標としている。参加者アンケートにおける満足度は指標を超過したものの、同じアンケートで捕捉している鑑賞経験では、毎年複数のオペラを鑑賞する参加者が大方を占め、鑑賞経験がない、あるいは年1回以下の少ない層の割合は16%に留まった。企画内容についてオペラ鑑賞頻度の高い方からも「新しい見方を知ることが出来た」と評価いただけていることは喜ばしいものの、本来の目的である新しい観客の獲得（＝観客の絶対数の増加によるオペラ振興）のためには、本事業の企画内容や広報周知の方法などに工夫の余地があるものと考えている。

令和4年度の事業においては、新型コロナの影響もあり、全体的に作品広報や事業周知の面での課題が残ることになった。他方で作品の制作体制や規模は例年並みであり、また質や内容面では来場者の評価を得たものと考えていることから、実演芸術の振興や地域の文化芸術の発展のため、より多くの（あるいは新しい）来場者を得ることができるよう、引き続き努力していく。

## (5) 持続性

### 自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展する（と認められる）か。

日生劇場の主催事業は、舞台芸術作品を制作・上演することで舞台に触れる体験を創出し、鑑賞機会を提供する公演事業を中心としており、そこに舞台芸術を楽しむ人々の裾野を広げるための普及啓発事業や普的観点を取り入れた広報的取組みが組み合わされている。このうち公演事業は、今回の助成対象である①日生劇場ファミリーフェスティバル公演、②オペラ公演及び③全国公演（全国各地の劇場において当劇場制作作品（①・②）を、児童・生徒向けの無料鑑賞教室公演、または一般有料公演として巡回させる事業）の3つに大別できる。また普及啓発事業は、今回の助成対象である、舞台芸術の鑑賞機運を高めるレクチャーやロビーコンサート、シンポジウム等の催しのほか、公演事業でも鑑賞教室事業や、(1) 妥当性で詳述したチケット価格設定や広報などを、舞台芸術の普及に資する取り組みと捉えて実施している。これら各事業や取組は相互に補完し合う関係性にあるが、特に今回の助成対象である本事業（①日生劇場ファミリーフェスティバル公演）における成否（作品のクオリティ）や持続性（計画的な予算進行）が、その後続く③全国公演の成否や持続性と強く結びついているため、本事業を改善・発展させていくことが、舞台芸術作品の創造・発信拠点としての当劇場全体の持続的発展のために不可欠である。

当劇場では、本事業終了後に、制作を担当する企画制作部職員と、技術部、劇場部等の各部責任者及び常勤役員による公演の評価会を実施、作品のクオリティや収支結果、広報・宣伝の実施内容を含めた全体的な総括を行なっている。評価会では、演出やその他のプランニング、演技・演奏等のクオリティが事前に設定された各作品の目標に対してどの程度の水準に達したか、統一的な基準に基づいて評価会の参加メンバーが採点した結果をもとにした振り返りとフィードバックを行うことで、次年度以降の公演事業の改善を図っている。

本事業をはじめとした主催公演事業では、公演を企画し、制作過程を適切に管理・進行する専任のアートマネジメント人材（6名。平均経験年数9年）が、作品の芸術性を担保するために就任した芸術参与と適宜相談を重ねながら業務にあたっている。また、日生劇場での公演では、舞台、照明、音響の各セクションで専任の舞台技術職員（17名。平均経験年数19年）が、大道具会社、照明会社の劇場常駐スタッフとともに、作品側スタッフの要望を最大化出来るよう対応しているほか、票券や案内業務は劇場運営職員（10名。平均経験年数14年）が担っている。これら職員の大半を正規職員として雇用する（正規雇用率91%）ことで、専門性の高い業務分野において人材を確保すると同時に、長期的観点での人材育成が可能となっており、先述の公演事業におけるPDCAサイクルに基づいた事業運営とあわせて、高いクオリティの公演を制作し、提供することへとつながっている。

当劇場の事業予算のうち、本事業を含む主催事業では、当劇場の設置者である日本生命保険相互会社からの寄付金・協賛金、行政や民間の補助金や助成制度に、本事業を含む日生劇場での有料公演の入場料収入で、また共同主催となる全国有料公演においては現地側主催者に負担いただく公演料を加えることで、事業実施に必要な費用を手当している。

以上のことから、本事業の実施は当劇場組織における人材面・財務面での体制強化に直結しており、翌年度以降の公演制作へとつながっていくとともに、劇場としてのミッション・ビジョンの実現へと寄与しており、令和4年度においてもその効果があったものと考えている。